

© Eastman Kodak Company, 1997

# KODAK Gray Scale



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8

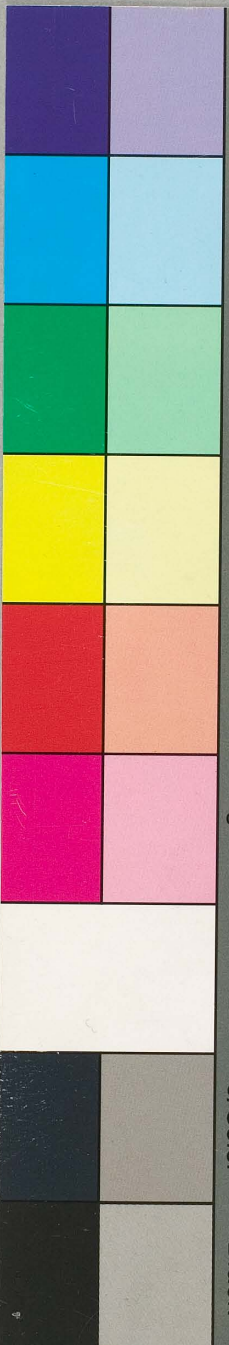
Centimetres 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

## KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak  
LICENSED PRODUCT

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



# 現英名百首

治尻絰一郎編輯

全





現

英名百首

沼尻絳一郎編輯

全













口よりみはれは 秋の夜を  
 のらむさきき月を 秋の夜を  
 こころに 秋の夜を  
 隠し 秋の夜を  
 も 秋の夜を  
 上より 秋の夜を  
 その人 秋の夜を  
 こころに 秋の夜を  
 愛を 秋の夜を  
 花を 秋の夜を  
 秋の夜を

明治十一年四月 穀旦

後世法

三條實美公

年形



實美公ハ三條實美卿の御子  
 あり然るに安政六年秋幕府  
 の命より經紳家ノ嫌疑の事  
 ありとて實美卿を變を  
 削らし幽閉をせしめり公之  
 を歎き哀しみ文々三年より  
 して天朝幕府の御間柄頗る  
 議論を醸しける公ハ六卿と俱  
 兩國より給ひ其後慶應元  
 年幕府征長の兵を還す公ハ  
 再び京師に趣き明治元年の  
 冬鳳輦を守護して關東に  
 下向倣し幕府の霸業を顛  
 覆し大政復古の功を立て  
 後従一位大政大臣に登庸  
 たりとあり

秋の夜を



具視公博識秀才にして豪邁  
沈勇の聞へ高く眼光炬の如  
拜するふ非常の人なるを知れ  
り維新の後右大臣に任じし  
平素公暇を得る時和漢洋  
書を研究せられ明治五年全  
權大使とあつて歐米各國を  
巡回し歸朝し征韓論  
を鮮破り皇國を捕翼俊しめ  
其後從一位に叙任しり



岩倉具視公  
いわのなまさ  
なわれ  
むし  
まは

孝允君ハ舊長藩にして本  
姓と和田と云ふ後一桂小五  
郎と改り吉田松陰の門人  
其後江戸に出て幕吏江川  
勝の面氏に就て西洋の事情  
を搜り其後長州に帰元  
治元年の秋長藩三家老  
を始め京都蛤御門の戦争  
の時木戸準一郎と変名して  
丹波路に潜み維新の後大  
政復古の功臣とあつて参  
議に任ぜられ一度職を辞  
暇を再び拝命して閣員  
十年五月廿六日西京に於  
て卒す



木戸孝允  
きど たかむね  
や  
な  
まは  
の



柳原光愛卿の御女として、幼少より歌書を好み志操雄々しく大内に仕ひ権典待し叙し平素皇暇を得る時、野史小説ハツカギらあり諸子百家の書以研究せし召使ふ者、ちとせをけ人の過を根問ず人の善を聞て悦び惡を聞て歎しと云

柳原  
夢子



退助君ハ舊土州藩士にて山内容堂侯の愛臣、剛豪才智の英傑なれ、戊辰の役には伏見の開戦より奥羽に趣き参謀となり、會津若松城に向へ搦手より攻入り終に降伏さるゝめ明治二年王政復古乃功臣とつて従四位の参議に任し、同六年征韓論の時、辭職して高知縣に歸り立志社に長し成りしと云ふ

板垣退助





利通君ハ薩藩士にして通稱  
市蔵と呼び甲東と号し天資  
英雄あり和漢洋書ヲ渉り  
慶應二年京師ニつり岩  
倉公ニ據り王政復古の大  
業ヲ論議して明治二年  
参議ニ任ぜられ維新の功  
臣トあり賞典禄千八百  
を賜る從三位ノ叙任シ同  
年既ニ江藤長の叛逆ヲ鎮  
み又臺灣征討の事起リ辦  
理大臣トあつて清國と和議  
同十二年五月十四日東京  
赤坂紀尾井坂ニあつて死  
の處ハ小四十三を期トシ  
薨



有朋君ハ薩長州の藩士にして  
維新の際ニ藩主秋彦と謀り  
朝廷ニ忠を盡し就中戊辰の  
役ニ奥羽へ出張して屢戦功  
あり明治二年陸軍少將ト  
幾程もろく正四位中將兼陸  
軍卿ニ叙せられ西南征  
討の参軍を命ぜられ  
有柄川総督の官と俱ニ肺肝  
を碎き奇計を以て賊軍ヲ日向  
ニ追討し遂ニ平定カスルヲ允





後藤氏ハ舊土州容堂侯  
 の愛臣ノ一正義絶倫の  
 英傑あり慶應二年容堂  
 侯の命を受け幕府書状  
 呈し大政復古なる一  
 辰の役には開戦し戦功屢  
 びれ維新の功臣と爲り参  
 議に任じ幾程も辭職  
 して経済學を專し  
 其後達来社の長と  
 ありしと云



喬任君ハ鍋島開叟侯ノ  
 愛臣として博識多才なり  
 文久三年京師にありて國  
 事に盡力し維新の際功あ  
 りて司法大輔任し幾程も  
 なく正四位司法卿兼参議  
 に叙せられて山口前原  
 黨の暴舉より西南事件  
 によりて迄屢々肺肝を  
 とらりて勉勵ありしと云





純義君ハ舊薩藩ニシテ智  
勇兼備の豪傑なり戊辰の  
役ハ奥羽ニ出張シて屢軍  
功ヲ平定の後海軍大輔  
ニ任シ明治六年従四位中將  
登庸ナリ西南の事件ハ  
肥後近海ニシテ疾ク  
艦隊を整備シ薩藩を  
固シ賊艦を拿ハ捕リ官威を  
熾シテ参軍トナリ鹿児島ニ攻  
入り遂ニ平定ナリ



道貫君ハ  
鹿児島縣の士族ニシテ  
頗る剛勇の聞ヘあり西南の  
事件ハ肥後路ニ出張シ高  
橋の戦ニ少佐の聯隊旗を  
賊軍ニ奪ハシト聞ユ道貫  
君ハ駿馬に鞭をカヒ敵中ヘ  
馳入り遮リ敵をバ馬蹄ニ  
蹴散ラシ難ク旗を取  
返シ味方の陣ヘ引返され  
ト云フ





福澤ハ豊後國中津の人  
 として幼少より蘭學に通  
 し開港乃後洋書をこ  
 んに研究し和漢の學に  
 渉り頗る博識多する  
 維新の後東京三田より  
 慶應義塾を設け多くの  
 生徒を募集し日夜教導  
 し仁智を開かしむるハ  
 實に外國に聞へ皇國の譽れ  
 たりとこそ



晴湖ハ下総國古河藩の  
 宰奥原何某の女として  
 幼少より書画をこゝみ  
 且詩文に通し別号を  
 東海と呼び頗る秀才  
 あり常に高位の人を  
 友とし文人画を以て江  
 湖に知られ英名を轟  
 かせし實に婦人の名  
 譽を知るへいとこそ





舊の家名を遼州屋と  
 呼び東京三十軒堀に  
 住居し懐の氣ふ  
 藩一就て國事一盡が  
 一終一獄舎の中一長  
 く繋し流刑となりし  
 維新の際一放免となつ  
 て横濱一つ一建築の  
 受負ひを業とし又  
 瓦斯燈を發賣して豪  
 高れ一人一皇國の  
 譽とらつて政府も金  
 益を賜られしと



今紫ハ東京高輪の産ル  
 して父を高橋何某と  
 本名幸女と呼ひ三代目の  
 今紫あり家長ハ金瓶  
 松本金瓶衛門北娼妓  
 あり先年舊幕府時  
 代の頃諸色高直し中  
 中難波の由を聞へ金  
 百圓餘を施し其後  
 ちる書生客とあり字  
 費一迫つて依頼す  
 今紫ハ金五十圓を差  
 出して之を一勉勵し  
 給ひと恵み





西村ハ下總國佐倉の人  
 憂國の志氣深く豪邁  
 維新以來東京  
 一ツリ家名を伊勢屋と  
 呼び海陸省の御用を一  
 に請負し納品倭製を以  
 て舶来の右一山事と發  
 明す既富國強兵の基と  
 爲かんと専ら盡かし  
 千葉縣下の海産を熾々  
 勉勵實に内國の豪  
 商といふなり

西村勝蔵  
 月  
 伊勢  
 山の  
 社  
 拜



柳園ハ通稱を重次郎と  
 呼び壯年より詩文ヲ涉り  
 花鳥山水ハ畫を能く  
 頗る大家なり此人性質簡  
 約一長者の風あり又  
 國史にも通じ弱冠の頃より  
 詩集を著さん事ハ心ヲ  
 遂に著す所の詩文數卷  
 あり風雅を好み人畫仙と  
 呼び専ら洛の大雅堂の風  
 ありといふ

福島柳園  
 家  
 柳  
 外





尚中先生ハ下總國佐倉藩  
 醫師かり身一憂事ありて  
 暇を乞ひ一器能を深く  
 おし許しうされ其後  
 維新乃際に朝廷より軍  
 醫監を命ぜられ東京に出  
 て良醫の譽れ高く人  
 皆ついでて診察を乞ふ  
 先生ハ再びヒを取す一普  
 ひ故嫡子進を以て療治セ  
 ー



順先ハ頗る外科の名  
 醫として戊辰の役より  
 奥羽征討の官軍に随  
 行し函館まで出張す  
 平定の後其功を賞  
 譽り陸軍醫監と  
 あり先生常一書校  
 能く療治に妙ある  
 良醫なり云ふ幾程なく  
 総監たる正五位一叙任  
 せり





福地ハ長崎の人ヨリて  
通譯を兼蘭洋の學  
ヲ漸リ維新の後官途  
に進ミ幾程多ク其職  
を辭シ新聞の社長  
設け局長たりて論  
說或ハ雜報小説等ヲ  
ツケウラナリ各國の新  
報一ツツケテ是を新  
聞紙ニ記載し江湖に  
示し開化進歩の魁たり  
此福地氏かりしと



岸田ハ博く和漢の書に通じ  
經濟學を專ラシて商法

ヲ達シて蘭洋の學を  
ヘ學ビて新聞乃社を設け多  
くの論說雜報を掲載し司  
長となり又賣藥の發明心  
を勞し精奇水と名づけろ  
目藥代營業カシ内國々  
ツケウラナリ外國迄も英  
名代轟かせしと





枕山バ方今名高き詩人  
 遊歴し兼て諸子百家の  
 書いふも渉るをもつて  
 小説も詩文章數百  
 卷に及ぶ書をもつて江湖  
 中華人も見聞して枕山  
 を皇國の詩仙なりと  
 題隅田川風景  
 東路遙迤隅水灣懷京門土  
 意沉沉誰知閑雅唯皮相中  
 有幽情寄渚禽



成島ハ舊幕府の奥儒者に  
 して和漢の書ハつゝも  
 詩文和歌も通し維新の  
 後官途を就かず此人秀才  
 なきハ別て著す所は書數百卷  
 あり又雪月花を友とて  
 閑居を閑静とす然るも日増  
 新聞雜誌の職をとりつて  
 論説戎朝野新聞に掲載し  
 又編輯の長とあり





正齋ハ通稱を貞亮と呼  
 び詩文を能し書ハ頗る  
 能書とて壯年の頃熾ニ  
 遊歴カシ老吏ニ及ヒ  
 私塾を東京龜澤町に  
 設け書を専らとし  
 多くの書法を創し法  
 帖著して江湖ノ轟  
 し能書を以て一仙  
 時ハ皇國第一等の書仙  
 たりと云ふ



支峯ハ山陽の長男として  
 三樹の兄なり頗る博識に  
 て國史に通したりしが先  
 年國事に盡力し第三樹  
 が幕府より疑ひを受けて縛  
 られ一時悉く辨解させ  
 とも用ひらるる却て嫌  
 疑を受故洛外ニト居し  
 姑くつづ洛中ニ出維新乃  
 後東京ニつづき幾程も々  
 西京にわづみ月留





博文君ハ藩長州の藩士として  
通稱を俊助と呼び博く和  
漢の書に通じ兼て蘭洋  
學を之に學びて詩文和歌を  
達し木戸氏と供に京師に  
ついで國事に盡力し大政  
復古の大業を成し其功に  
より参議工部卿を兼ね  
任し又明治十一年五月正四位  
内務卿に轉叙  
せらるなり



紅蘭ハ星巖の妻として  
博く和漢の書に通じ  
頗る烈女なり其書畫  
和歌も達し夫死して  
後洛に入り慷慨有志  
の輩と交り其をそれ  
等々難く過るを匿ひ  
ける遂に幕府の疑ひ  
を受け隠れ潜居し  
再び京師に入りて





一翁君ハ舊幕府の臣として始り越中守と云ふ隠居して一翁と呼び再び参政の格に進み戊辰の戦争に西城にうつて総督官へ君臣同體の罪を軍門に謝し開城をして官旗代迎へ恭順做せしが維新の後に至り東京府知事以拜命す幾程もろく従四位議官叙任せらばと云ふ



小弥太君ハ旧長州藩士として頗る英雄なり戊辰の役より伏水の開戦より薩藩隊と共に奥羽に至り屢々軍功あり平定の後陸軍中將となり佐賀熊本山口の乱を鎮め明治十年二月西南の事起りしに総督の官に俱し肥後路に赴き之を平定するに従四位三等議定官を兼任する





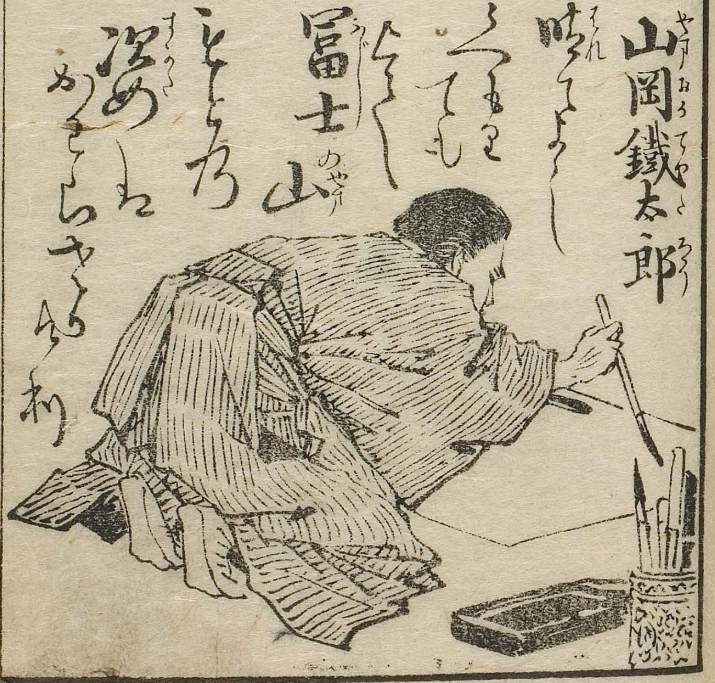
重信君ハ旧佐賀藩士にして  
博識多才ヲ開叟侯ニ就  
て國事ニ盡力シ大政復  
古の大業を成シ  
其後官途ニ上リ  
参議ニ任シ明治六年  
正四位大藏卿を兼任シ  
同ノ十年西南ノ事起リ  
西京行在所ニテ  
兩大臣ト俱ニ謀リ平定ス  
一々ニ

大隈重信



山岡氏ハ旧幕府の臣にして  
壯年ニテ擊劒を好ミ博識  
多才なり無テ書を能ク  
戊辰の戦争ニハ勝氏ニ就テ  
事を謀リ田安龜之助君と以  
て徳川の養子と定め遂に  
静岡ニつゝ其後官途ニ  
就テ從五位宮内大丞茂  
拜命シ幾程もなく皇  
后宮亮ニ唱ヒ替ヘ  
あり

山岡鐵太郎





利良君ハ旧薩藩士ニシテ  
文武智勇を兼備し和漢  
洋書ニ渉り戊辰の役ハ  
屢軍功あり平定の後大  
警視ニ任し明治十年西南  
支起りて陸軍少將を兼  
任し別働第三旅團の兵  
率て熊本城の圍を解  
き鬼ヶ嶽の壘を拔き遂に  
鹿児島に連絡を  
通しけり



川路利良

さるに  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた

宗光ハ紀州藩士ニシテ  
戊辰の役ハ奥羽函館ニ出  
張る一軍功あり維新  
の後神奈川縣令となり  
幾程もろく従四位元老  
院議官ニ任し頗る博  
識の開へりしが明治十  
年西南事件ニ關係あり  
不審を被り拘引の上禁  
獄ニあり



陸奥宗光

あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた



清隆君ハ旧薩藩士として  
 文武兩道に渉り長乃  
 後ハ奥羽の館に出張し  
 屢々戦功あり鎮  
 撫の後北海道を巡  
 廻し屯田兵の事  
 を建議せり依り  
 正四位の参議兼  
 關東使長官に任じ  
 明治元年西南の支  
 起り勅使代京卿と俱  
 鹿兒嶋より  
 肥後の熊本城より  
 通し連絡を



渋澤ハ一橋家の仕ひ徳  
 川民部卿に随行し佛  
 蘭西より維新の後  
 帰朝して官途に進み  
 職を辞し経済学を専  
 らにし富國強兵の基  
 をひらくが為め商法  
 律を正し遂に國立銀  
 行の創業を成し普く  
 皇國第一の社と





馨君ハ山口縣士族にして  
 博職多才あり明治八年  
 十二月十三日黒田清隆君  
 を特命全權辦理大臣  
 とし、蒙官井上馨君特命  
 副全權辦理大臣となり  
 詔命をうけ朝鮮へ航海  
 し同九年一月朝鮮金  
 山浦に着船し二月廿六日  
 談判調へ和親を約し三  
 月四日帰朝なりけり



大倉ハ西洋器械學に勉  
 勵なり専ら舶來の器械  
 を買入諸官の御用を請  
 け内國より發明せし器  
 械を各國に運輸あり捌  
 賣せしに成勞しき洋物  
 ハ何品もおふぜり東京  
 尾張街に煉化石をとり  
 數十軒の建築をし反物器  
 械営業せし實ハ皇國に  
 譽れり豪商と云ふべし





隆吉君ハ静岡縣士族として  
 温雅沈勇の人あり山口  
 縣令を拜命し前京黨の  
 暴舉を以て巨魁一誠  
 か獄中よりつて罪を待  
 一頃隆吉君ハ或日  
 から一陶の酒を携へて  
 其鬱を慰め一誠は迎ひ  
 遺言をうけんは我身に  
 罪受け果すべし心ろ  
 おさる言ひ残されよ  
 と懇々傳ひし故一誠ハ  
 落涙する其後一誠の  
 児を周旋して  
 入塾させたりと



黄村ハ舊幕府の臣として  
 始榮五郎と呼び車入  
 正一叙し清水民部卿  
 と俱し佛蘭西に到り歸  
 朝の後徳川の参政たり  
 此人博識多才にて洋航  
 してより洋学を大に學び  
 詩文にも達せし維新の  
 後静岡に入り官途を望  
 ず私学校教師となつて  
 出京せり





武揚君ハ舊幕府の臣ニ  
 して正義絶倫の英傑  
 ナリ 戊辰の戦争ハ武州  
 品川沖より田陽丸ヲ乗  
 組ニ函館より官軍を  
 悩サ事屢ナリし田陽  
 丸、破船して遂ニ降伏  
 ナシ 長く獄舎ニ鮮カ  
 レ其後放免され官途ニ進  
 ミ特命全權公使となつて歐米  
 各洲へ廻むもや

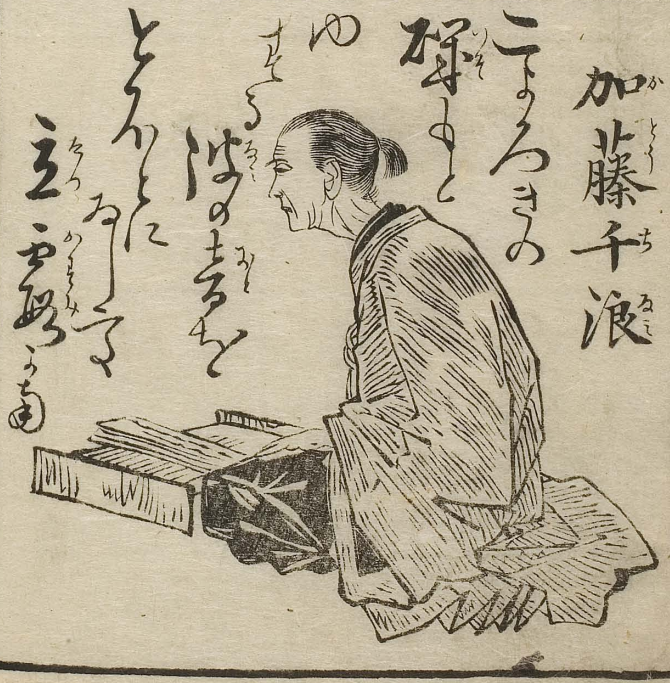


榎原ハ舊幕府の臣ニ  
 して真景流の達人ナリ 就中  
 柔術ニ涉リ東京下谷廣  
 徳寺門前ニ道場を構  
 ヒ 撃劔會を行業シ  
 本朝の昔ニ忘れ  
 ず 其教導我  
 等ニ是を江湖ニ  
 示シ方ナリ





千波ハ通稱を称三郎と呼  
 ひ萩國と号し陸奥國  
 白河の産として名高き  
 歌人なり國學に通じて  
 書を能く既一橘千蔭  
 の末裔なりといふ人おれ  
 とすよりこれハ藤原姓  
 あり多く真淵宜長の風  
 を慕て譽の著述なり時ハ  
 明治十年十月大享年六十八  
 とき卒れ



花蹊ハ西京の人なり志操  
 雄々として博學多才  
 なり丈夫は愧ぶべからざる  
 烈女多しが畫を能く維  
 新の後東京より女子  
 女學校を創立し華族  
 官員の幼兒を教育し  
 て且畫學校をも取設け  
 多くの塾生（教）を為し  
 畫を以て名を轟けり





富姫ハ宇和島藩知事伊達氏の女ナリ十七歳一て島津家の公子悦三郎へ嫁して婚姻の約を結ビ攝州神戸まで著サ一頃鹿兒島ハ早戦地となり一且父母の家を出て夫一帰づく上ハ海底一へて薬屑と云ふんも吾儕ハ厭ミト鹿兒島一渡海セト一



鳴尾女ハ舊會津家の老女をつとめ戊辰の戦ひ一ハ京師一に於て艱難セリ一遂ニ女教師と云つて昔一優る身分なりと子ハるく尺蠖の直道兄弟を杖柱と頼み一思ひ既一武備一勝れ一家一に頗る烈女なり彼の兄弟西南征討の官軍中一りて数度の戦ひ一武功をひき一討死をともやし音信絶一を自から推察る也一





高福ハ八郎右衛門を  
皇國第一等の長者に  
て風雅を専ら  
常ニ書を好み詩文  
達し雇僕を恵み市  
中の貧家をたね年  
一兩三度の施行を  
又官省へ赤心を  
國産に盡力して多  
事成功なり



岩崎ハ土州阿氣邑の郷  
士として文武を好み常  
忠憤の心深く幕府各國  
へ和親して開港を許せし  
時土州近海を測量し  
憂國の志氣烈く此人維新  
の後藩主と謀り多くの  
船を輸入三菱商會の社  
長となり山口鹿島の挙動  
軍艦を以て屢朝廷へ功  
を奏し頗る英傑なり





行誠和尚ハ東京本所圓  
 向院の僧侶として博識  
 多才なり佛書ハつゝも  
 うらなり國學詩文も  
 通じ國事ハ盡かして  
 擊劒を善し勤王の  
 志氣ありて維新の後  
 小石川傳通院へ轉住し  
 て説教を熾し常に風  
 雅の心ありて和歌を好む



是真ハ通稱を順藏と呼  
 び舊時繪師なり風雅  
 の心ありて文人畫を好み  
 詩文和歌も通じて  
 俳諧の席へ多く列なり  
 常に友人を多くみ性  
 質簡約として詞を好む  
 弱冠のときより頗る奇人  
 の聞へたり俗人と交るを  
 辭すとす





安芳君ハ幕府ニ仕イ始メ  
 麟太郎と呼ビ博識多才  
 方安政二年四月長崎ニ  
 蘭人ヲ就キ蒸氣船  
 の運轉を學ビ其後水師  
 提督トシ安房守ニ任シ  
 國事ニ盡力シ維新の  
 後ハ静岡ニ住セラレ  
 參議ニ拜命サレ再官  
 途ニシテ幾程モ老辭職シ  
 事ハ風雅ニ遊びける云



隆盛ハ通稱を吉之助と呼ビ南  
 洲ト号シ博く和漢の書ヲ通ジ  
 無類の英傑たり大政復古の功  
 臣ニシテ正位陸軍大將ニ叙任  
 し賞典祿二千石を賜リ  
 後辭職シ鹿兒島ニ歸リ明  
 治十年二月朝廷ニ尋問の  
 事アリト肥後ヲ開戦  
 天運ニシテ九月廿四日薩州  
 城山ニ自殺ス行年  
 五十七歳なり





千城君ハ高知縣士族ノ幼名ヲ守部トシ國氣絶倫ノ英雄ナリ大儒安井先生ノ師トシ和漢ノ書ヲ研究才茂辰ノ役ハ舊藩ノ監察トシつて興羽ノ戦功歴々ル其後陸軍少將ト任シ明治九年熊本鎮臺司令官トシ同年二月鹿兒島ノ兇徒熊本城ヲ用ミ大戦ヲ戦フ物ノ屑トモセテ六十餘日ノ籠城ヲ遂ニ一度モ不覺トシテ徒勞トシ首尾全クナリ



小勝ハ本名ヲ勝女ト呼ビ東京茅場町邊ノ藝妓ナリ故アつて種田政明ノ妾トナリ肥後國熊本ニ到リ明治九年十月神風連ノ暴徒等鎮臺邸ヲ討テ種田少將ヲ殺死シ場ハ手紙ヲ負ヒ熊本ニ治癒セシ折ニ薩徒熊本城ニ迫ル勝女ハ城中ニ官吏高木何某ヲ慰慕セシ堅ク禁メ無末ニ高木何某ヲ差出し哀む高木何某ハ遂ニ思ひ止リ翌日花岡山ノ麓ニ戦死セリと聞キ勝女ハ念ニ及ビ





網<sup>み</sup>良<sup>ら</sup>に鹿<sup>か</sup>兒<sup>じ</sup>島<sup>しま</sup>縣<sup>けん</sup>士<sup>し</sup>族<sup>ぞく</sup>は  
て前<sup>ぜん</sup>名<sup>な</sup>格<sup>かく</sup>之<sup>の</sup>助<sup>すけ</sup>と<sup>よ</sup>呼<sup>よ</sup>ひ報<sup>ほう</sup>國<sup>こく</sup>の  
志<sup>し</sup>氣<sup>き</sup>深<sup>あか</sup>く維<sup>い</sup>新<sup>しん</sup>の<sup>よ</sup>際<sup>さい</sup>は屢<sup>しばしば</sup>  
戰<sup>いくさ</sup>功<sup>こう</sup>あり依<sup>よ</sup>て鹿<sup>か</sup>兒<sup>じ</sup>島<sup>しま</sup>縣<sup>けん</sup>令<sup>れい</sup>  
を命<sup>めい</sup>ぜらる然<sup>しか</sup>るに西<sup>さい</sup>鄉<sup>きやう</sup>黨<sup>たう</sup>  
と興<sup>おこ</sup>して暴<sup>ぼう</sup>拳<sup>けん</sup>を援<sup>えん</sup>け金<sup>きん</sup>穀<sup>こく</sup>  
彈<sup>だん</sup>藥<sup>やく</sup>を送<sup>おく</sup>り事<sup>こと</sup>顯<sup>けん</sup>れ遂<sup>つい</sup>に  
官<sup>くわん</sup>位<sup>い</sup>褫<sup>ち</sup>奪<sup>だつ</sup>の上<sup>の</sup>長<sup>ちやう</sup>崎<sup>き</sup>臨<sup>りん</sup>時<sup>とき</sup>  
裁<sup>さい</sup>判<sup>はん</sup>所<sup>しよ</sup>へ護<sup>ご</sup>送<sup>そう</sup>され該<sup>がい</sup>地<sup>ち</sup>に  
おつて明<sup>めい</sup>治<sup>ち</sup>十<sup>じゅう</sup>年<sup>ねん</sup>九<sup>く</sup>月<sup>げつ</sup>廿<sup>にじゅう</sup>五<sup>ご</sup>日<sup>にち</sup>  
刑<sup>けい</sup>せらる

新八しんぱちハ舊薩藩士きゅうさつはんしより  
桐野篠原きりののしほはらの右みぎに出る英確えいかく  
なり維新いしんの後陸軍りくぐん大佐兼おほさけかね  
宮内大丞みやうちだいしやうを拜命はいめいし右臣みぎのおみ  
岩倉公いわたかくは随行ずいぎやうして歐米各おうべいかく  
國くにを巡廻くわんわいす歸朝きしやうののち  
鹿児島かごしまに歸り明治十年めいしじゅうねん  
西郷黨さいきやうとうと共に官軍くわんぐんを  
悩なやす事屢しばしばありしを遂ついにに利  
を失うしなひ城山じやうざんはいつて  
自殺じそくす

大山綱良



村田新八

後<sup>のち</sup>の世<sup>よ</sup>は必ずと云ふは世<sup>よ</sup>の

[illegible]



尚雄ハ鹿兒島縣士族として中原正平の嫡子なり  
 警察官吏とつて少警部を拜命し明治十年一月疾くも西南の事件を察し帰縣して兇徒の爲め捕ひられ獄舎に繋れしを勅使柳原卿下向ありし後護送せられ東京より

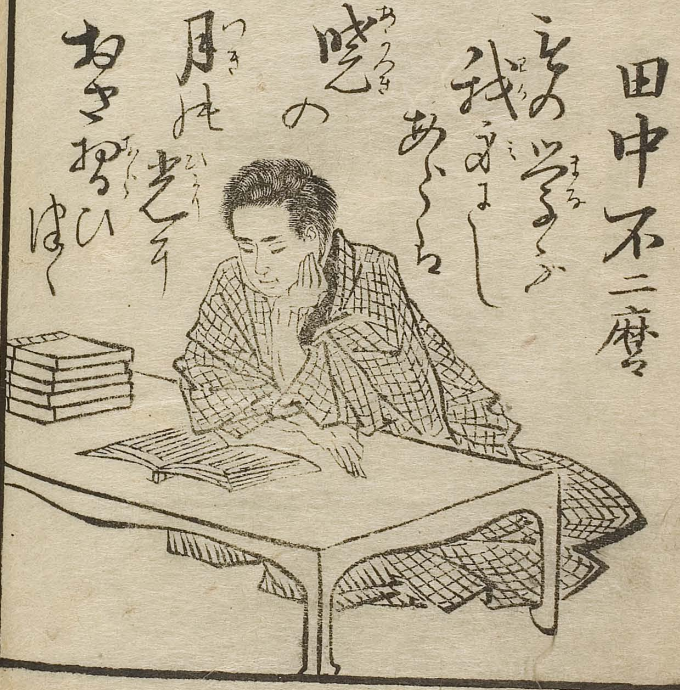


鐵然ハ真言宗の僧として博識多きなり官の許を受け薩州鹿兒島より縣下を布教の爲徘徊せし折柄其他真宗東派の別院より教法弘通の爲め縣下へ入みし僧侶を兇徒等捕押ひ十元を切害し鐵然ハ辨解なせし事あり獄舎に繋かれしを勅使下向の節東京へ護送されけり





不二磨君、舊尾州藩士  
 として博く和漢の書に  
 通し、兼て蘭洋の学を  
 究みて詩文和歌も達し  
 維新の後文部大輔と  
 なり、内國へ公立學校  
 を發業する事を建言  
 し遂に採用あり盛大  
 なる事、其後從四位  
 1 叙任せられ也



島津久光公の四男として  
 膽勇秀才なり明治十  
 年四月島津家兩侯の名  
 代として舍弟忠欽ぬし  
 と俱し西京に著し島津  
 家より徳大寺宮内卿へ  
 宛たる書翰を差出し同  
 月十六日参内の節屢々  
 議論あり士族よりて  
 華族の扱とありて退出  
 せしとあり





昇君ハ長崎縣士族ヲ  
 博學多才ナリ大坂府の  
 知事を拝命して  
 府下の人民を深く恵  
 ん民権を専らとし裁  
 判を聞て罪の黑白を知  
 る事非常人ナリ公暇  
 を得る時ハ洋書を研  
 究し性質詞少くし  
 て頗る英傑  
 たりと云



多助君ハ山口縣士族ニ  
 實直絶倫の博識ナリ諸百  
 家の書ハも更ニ野史小  
 説も通し埼玉縣令となつ  
 て從五位任じ明治十年二  
 月西南ノ吏起リ縣下の士  
 族征討役軍を頼み出され  
 之を厚く注意して登壇  
 の節自ら戸田川まで  
 見送り盃酌しつゝ  
 訣別をす





三洲ハ豊後國の人にて  
 長藩ニ仕ひ博く和漢の  
 書ニ通じ詩文章ハハハ  
 更ニ野史小説ニ渉る  
 著書ニ著すところの書  
 數百卷あり書画を能  
 く頗る大家を以てハ  
 衆人の屢知るところニ  
 一て所謂能書の一  
 等なりといふ

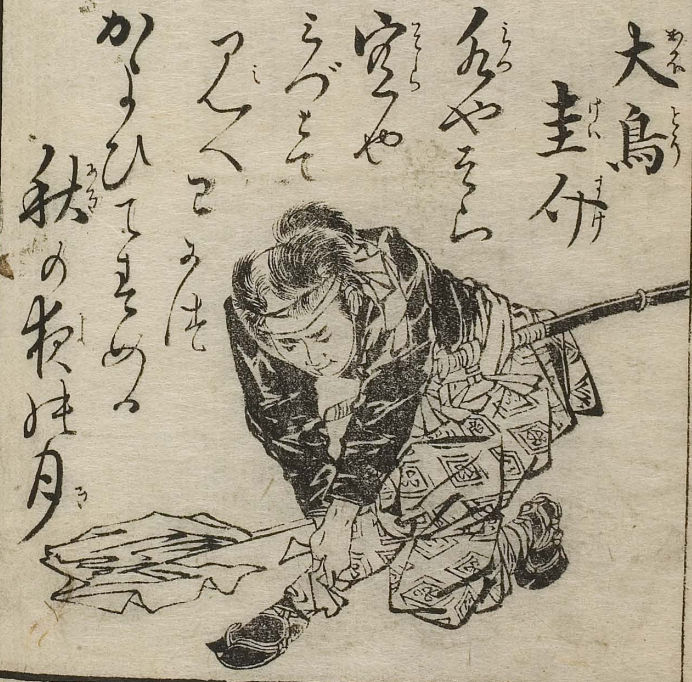


川田ハ性理學を修め書を  
 數多著述して其德行世  
 ニ轟キ大儒を以て兼て  
 洋學を學び詩文和歌  
 一連門人等を多く  
 擧て公立學校の教師  
 と爲し内國へ漢學を  
 傳へんと盡力せしハ  
 實ニ頗る賢者ニ  
 仰ぎけり





大鳥氏ハ舊幕府ニ仕ヘ  
 強勇無類の英傑なり  
 戊辰の戦争ニハ榎本ト  
 俱ニ回陽丸ニ乗組ミ  
 函館ニ脱一官軍ニ  
 抗一屢防戦ニ遂  
 ニ利ヲ失ヒ降伏一  
 禁錮され一其後赦免  
 アリ官途ニ進一工部局  
 長ト拜命ス一



大鳥  
 圭介  
 秋の夜は月

小華ハ三州田原の人トシテ  
 渡邊華山の嫡子ナリ生長  
 の後椿山ニ就テ書を學ビ  
 専ラ亡父華山の画風ニ  
 リ頗ル名譽ナリ一  
 諸國遊歴の後ハ古郷田  
 原ニ歸リ雪月花を友  
 トシテ風雅の心アリ詩  
 文和歌一ト云  
 達セ一ト云



渡邊小華  
 少々々々  
 月も花も  
 雪も  
 照る  
 夜は月



其水ハ通稱を新七と呼  
び狂言作者として久しく  
劇場の關係なし無類名  
譽の人物なり開明の後和  
漢の書は光眼を以てし  
西洋翻譯書も専ら研究  
して俳優の才を示し  
劇場の旧弊を一洗する  
と社長守田勘弥は談合  
し新著は勉勵する



潮花ハ壮年より博く和  
漢の書に渉り軍談師の  
英俊なり兼て易学の  
深理を研究し野史  
小説にも通じ辨舌の妙  
を著し狂談を吐ず讀  
書にちやうく講談し  
専ら古風な演舌を  
社中の教導せり





家号を糸屋と稱し其先  
 信州飯田の産なり壯年  
 一武州横濱に出で商  
 業一專ら勉勵を  
 實一皇國無類の英商  
 たり其氣豪邁として  
 頗る人望高く又東京  
 横濱の兩所一諸會社  
 を設け經濟學を熾し  
 せ一人其積徳を稱し  
 て天下の糸平と呼び  
 其名を海外一轟かし  
 たり

田中平八



かゝる  
 銭月  
 花  
 丹  
 雲

奴ハ小名を勝女と呼び今  
 堀保科仁を衛の娘として  
 明治五年の春十三歳を酌  
 女となり住吉町に當業す  
 常一両親の手元一在る  
 事を歎き其年暮一両親  
 俱住吉町より養育せ  
 し其實一孝心深く其諸  
 藝一專ら勉強し同トく  
 八年に藝妓となりて其  
 勤一心を盡し普く江湖  
 一其名譽を知られけり

河内家奴



あゝ  
 らる  
 らる  
 らる



春湖ハ尾州の産物ノ學  
 俳徊ハ名高き人  
 如少ヤ行脚して  
 内國をめぐり多く関  
 東ノ遊學一實直なり  
 諸子百家の書ヲ通ず隠  
 逸して人ノ媚る心ヲ厭  
 奇人たりといふ

海老の味  
 新なる味  
 新なる味  
 新なる味

小竹庵春湖

住人



下庵

五代友厚

我々のため

民

と

以

ては



五代ハ薩州の人として豪  
 商なりし憂國の志氣深く  
 専ら國事を盡力して維新の  
 後桐野陸軍少将永山大  
 主典と同伴して樺太邊を巡  
 廻し北海道産物運輸に勉  
 勵做し開拓の事務は心  
 を勞し官費を除くと  
 して既に北海の難澍を凌ぎ  
 蒸氣の運輸を成しよる  
 する實に支厚の憤發す  
 出る所なり







麟祥君、作州津山の藩士  
 として博く和漢の書に通  
 兼て洋学を學びて既諸  
 子百家の書につかみさら  
 野史小説に渉るをもて  
 著す所の書数百卷有  
 文久慶應の頃國事に盡  
 かし維新の後官途に  
 進み司法省大書記官  
 叙任



桐野、幼名を中村半次郎と呼  
 ひ鹿兒島城の上吉野村に成  
 長し薩藩に仕ひ成辰の役  
 主ハ總督の官に随ひ江戸に  
 到着し又會津に向へ敵を悩  
 ます事屢あり奥羽平定の後  
 陸軍少将に任し兼熊  
 本鎮臺司令長官となつ  
 て熊本に至り幾程あるく  
 辞職して鹿兒島に帰り西郷  
 と謀り明治十年二月肥後  
 に暴挙し戦利なく終り  
 薩州城山に自殺せり





平山ハ舊幕府に仕ひ博  
 職多才として始め鎌次郎  
 と呼ひ圖書頭一任し  
 参政の格に登庸して國事  
 に盡力し既して將軍慶喜  
 公大政を返上成すに仍て  
 平山ハ退職し寄合の席  
 一列り維新の後静岡に  
 いて近國を遊歴し遂に  
 東京赤坂氷川社の神  
 職となり説教をこころ  
 よくしやうとぞ



介石ハ肥後國熊本の  
 僧侶として奇才あり  
 博く和漢の書に通し  
 諸國を遊歴為して佛  
 書の講義を専らとし  
 兼て究理を説き衆人  
 に示す其英名を  
 江湖に轟かし普く  
 此僧に議論する者  
 出る人あしとぞ





山川ハもと會藩として大蔵  
 と稱し文武兩道に長し初末  
 活潑機敏なる生質あり成  
 長の戦争に會津藩官軍  
 に抗敵するの際に軍功あり  
 遂に降伏となりて禁錮せ  
 られ其後官途に就て陸軍  
 中佐を拝命し佐賀に赴き  
 り浩は直に追て佐賀城に討  
 入りし其時重傷を受け非  
 役士官となりし西南事件  
 に戦地へ出張し熊本城に先  
 登せられ連絡を通し



松平ハもと幕府の臣なり  
 勇猛にして頗る義氣  
 あり成長の戦争に榎  
 本と俱に回陽丸に束組  
 み函館に脱し屢官軍  
 に抗撃し遂に降伏  
 為し禁錮せられし  
 其後赦免あり官途に進  
 んだ幾程となく辞職し  
 て風月を供し樂





宗則君ハ舊藩藩士にして  
 博識多才なり文武智勇  
 但兼備し且洋学ヲ  
 渉り戊辰の役ハ伏水  
 の開戦より奥羽を平  
 定なし維新の功臣と  
 あつて参議となり正四  
 位外務卿を兼任し  
 其後臺灣の一挙より  
 支那朝鮮の事件より  
 肝膽をくちみ而大臣と便  
 容易に事を運ひ皇國の  
 美事を万国へ輝けり



吉直君ハ柳川藩士  
 して膽勇多事衆に起  
 たり戊辰の役の戦功より  
 つて陸軍中佐兼少警視  
 を拝命し明治十年二  
 月西南の事起る否や然  
 本より出張して多くの賊  
 壘を抜き鹿児島に赴  
 き凱旋の終り迄数度の  
 激戦におよひ勇名  
 を轟かしけり





阿部景器ハ熊本縣士族  
 して才力明治九年  
 十月神仏連或ハ敬神黨  
 と唱ひ暴徒ヨカリ本  
 意を達せん我々家立  
 歸り仔細を妻ニ語り  
 自殺望む時妻伊幾女  
 ハ鳥居何某の妹ナリ  
 未練カキリ舞杯を  
 毫毛も出さん夫景器  
 ハ最期を進め其身も  
 遂ニ死ニ伏ス



三柳子ハ井上文雄の門人  
 幼少より和歌を好み風  
 雅の心あり故に文藝政  
 とう一見識ある女ナリ  
 高位の人ヲ招かせ又三柳子  
 も客を選り振リ客  
 ソゾ華族官達の人ハ出  
 て和歌をもて慰め其の  
 狂あるを稱しけり其  
 後藝妓を雇業して歌  
 學を専らせしハ實ニ  
 稀なる怨婦ナリ





治兵衛ハ旧来東京下谷池の  
 端一住して薬舗を業とす  
 其性書画と好む世を嗣がれ  
 以て朋友と語り専ら金家  
 の和順するを成樂む或ハ常  
 一言行満るものハ必す欠る  
 故に富貴ハ終に禍害を生  
 し貧賤ハ及に開達の理也  
 と詠み文久二年寶丹を撰  
 る一種の奇藥を發明し方  
 今其名を全州に震ふ普く  
 衆人の求む應じて招牌を  
 認む書体ハ一派を為と以て  
 人呼んで寶丹流と稱けり

守田治兵衛

白く福と  
 金も  
 玉とむ  
 疾くの薬  
 身ハ



世履君ハ長門の人にして博  
 識多才なり維新以来官  
 途に就て屢國事を盡力  
 し従四位二等判事に登庸  
 ち一専ら法律を正し  
 裁判に肺肝をくたけり  
 且仁智を開かりか為  
 經濟學を以て江湖を示す  
 其功著てみんくく實  
 皇國の名誉を知るべし

玉乃世履

人の宝を  
 けり





重臣君ハ舊長藩士一ツ  
 温良沈勇なり幼少より  
 文武を好ミ頗る英傑な  
 止ハ戊辰の役ハ奥羽一  
 張して屢軍功あり平定  
 後陸軍少将となり明治  
 十年二月西南の支起る  
 否や野津少将と俱ニ征  
 討先鋒となり肥後の戦  
 地につくる第二旅團兵を  
 率て熊本城の圍をこさ  
 連絡を断じけり

三好重臣



せきふま  
 まるあ  
 月ちさだ

ねみ  
 こころ  
 へ

友幸君ハ山口縣士族一ツ國  
 事ハ盡力シ維新の後内務  
 少輔ニ任ぜられ明治九年より  
 十年一月頃大分縣下近辺  
 を巡回中鹿児島暴拳  
 沸騰を疾くも搜り聞て  
 説諭を加ふるが為め薩州  
 赴きしが兇徒ハ國境の要害  
 を固め上陸を拒ミし故直  
 ちハ長崎へ傳報し忽ち  
 艦して断然征討の派出  
 注意せし

林友幸



おの  
 白  
 玉川



池邊ハ熊本縣士族にして  
 武術を好み兵學に通じ且  
 軍畧深く西南ノ事起  
 りし時鹿見島黨ヲ荷  
 擔なし日向路ヲ操出し  
 官軍ヲ抗撃し猶大隅  
 一退き桐野の兵と喋  
 合ひ屢々戦ひし明治  
 十年十月十六日同國郡  
 山郷ニおつて縛られ就  
 けり



尚信君ハ旧薩藩士として  
 博く和漢の書に通じ魚  
 て蘭學をも之學ひて詩文  
 章に達し維新の際ニ  
 京師ニおつて國事ニ盡力  
 し官途ニ就て其後歐洲  
 を巡迴し洋書ニ長じたり  
 特命全權公使となり  
 従四位ニ叙任して  
 外國ニつたりするあり





孝平君ハ弱冠のとき中  
 國に遊びて和漢の書  
 通し兼て蘭洋學を  
 學び詩文章を達せし  
 性質簡約にして詞少  
 く頗る長者の風あり  
 維新の後神戸の縣令  
 となりて人民を深く惠  
 程よく元老院議員たり  
 今從四位文部少輔に轉  
 任するなり



小野ハ旧常州笠間藩士  
 として測量學に達し幕  
 府に仕ひ江城の建築に專  
 り盡力し旗下列となり  
 維新の後洋算を職全  
 し指南所を開き一ツの  
 校を設け和洋共に教  
 導をなし多く塾生を  
 集め頗る門前  
 市をなすなり





從道君ハ西郷隆盛の弟  
 として膽勇秀才なる常  
 報國の義氣あるや、戊  
 辰の役も人より後、事  
 を恥とし、既、軍功を以  
 て陸軍中將となる。明治  
 十年西南の支起り、陸  
 軍卿代理となり、或、日友  
 人は語て嗚呼、兄をして歐  
 羅巴を見せしは、此拳を全  
 ましと勇氣を替らざる共自ら  
 嘆息の涙を浮べしとぞ



篠原ハ旧薩藩士として  
 幼名を冬三郎と呼び、和漢  
 の書を通じ、武勇絶倫の  
 英雄なり。戊辰の役、軍功  
 ありて陸軍少將に任  
 其後、辞職して鹿児島へ  
 帰り、西郷と事を謀り、明  
 治十年二月、先鋒の大將  
 となり、一時肥後熊本とい  
 り、植木田原は威をまされ  
 する官軍の為に、壘を破  
 られ、終に彈丸にあたりて  
 吉次越の露と消へり





A woodblock print illustration of a seated man with a beard, wearing a traditional Japanese robe, holding a small object in his hands. He is surrounded by large, stylized Japanese calligraphy characters. The characters include '由利公正' (Yurikane Masamune) and '一' (one).

諱を慶永朝臣と稱す越前  
福井の藩主たり安政五年  
の秋嫌疑の事ありと隠  
居とせし萬延年間撫  
裁職に擢挙され正義を  
主張せしゆ有志等大  
く欽慕せし程程も  
職を辞し京師より  
しる戊辰の役ハ本國  
越前福井より忠  
憤せしとぞ

[illegible]



林ハ上総の領地ニありて徳  
 川征討の兵關東へ下向  
 聞や否や無類の英雄を東  
 船にて相州小田原に渡り大  
 久保の兵を募り箱根の嶺  
 一々籠り脱兵を率入れ  
 官軍へ挑撃せしか大軍  
 の為ニ追討され豆州熱  
 海に航海して本領へ返  
 り降伏の書を給督官に  
 呈し謝罪恭順して



種樹君ハ日向國高鍋の旧  
 知事秋月土佐守の次男  
 少く知少く博く和漢の  
 書を学び且詩文に通し  
 舊幕府の頃参政となり  
 て國事に盡かし維新  
 後舊領地ニつくりしが  
 其後官途ニ進み従四  
 位の議官ニ  
 叙任せられたり





諱を容保朝臣と稱す尾  
 州家の三男として會津  
 若松の藩主たり文久年間  
 京都の守護職をもちて  
 長藩と葛藤を生じたり  
 其後征長の事止り徳川内  
 府大政返上せし折柄内府  
 一隨行して大阪より再  
 び上洛の先鋒となり官軍  
 北撃し利を失ひ奥州會津  
 津より退き籠城して官軍と  
 數度戦争し及び遂に降伏  
 し謝罪實効を相立其後  
 斗南藩知事となつて隱  
 居となりけり



松平容保  
 若松

夢覺て  
 くらひものみ  
 田舎に甲斐  
 仕そらんけり

諱を慶喜公と稱す水戸  
 烈公の第七子として一橋家  
 を相續ちし京師に於て徳  
 川十五代の將軍となる慶應  
 二年政權を返上し奉り  
 阪城より再び参内を乞  
 として伏水に開戦し江城  
 に入り退城りて水戸に  
 て恭順謹慎を謝罪の  
 實効を相立て駿州静岡  
 に入りてあり



徳川慶喜公  
 君々ため  
 民の爲とて  
 身を成  
 忍ぶ忍び  
 聖潔の袖

忍ぶ忍び  
 聖潔の袖



久光公ハ島津忠義卿の父君  
 として性質英明なる故為  
 すところ皆意表し出て然る  
 一丈久二年の秋勅使大原卿  
 を警衛して関東より下り事  
 決し歸洛の節久光公ハ其頃  
 島津三郎と呼び國事を盡  
 カせし折柄ふれハ東海道生  
 麥村へさしかり英人の不禮  
 やむを得ず三名を切殺其後  
 諸卿王政復古を辭解を  
 維新の功臣とあつて從三位内閣  
 顧問を拜命し辭職してよ  
 り旧領鹿兒島より從二  
 位左大臣に叙任し



明治十二年七月十六日出版御届  
 同 十三年二月廿日 出版

編輯者 沼尻絳一郎

京橋區南鞘町廿七番地

出版人 力石安之助

日本橋區通二丁目十一番地

東京芝三萬町	和泉屋市兵衛
同 日本橋通二丁目	山城屋佐兵衛
同 同	同 源吉
同 三町目	丸 屋善七



同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
通	油	馬喰町二丁目	淺草茅町	銀座二丁目	四丁目	日本橋通一丁目	二丁目	三丁目	南傳馬町二丁目
森	藤岡	山口	須原	和泉	同	大	小	鈴	小
屋治兵衛	屋慶次郎	屋藤兵衛	屋伊八	屋孝之助	北郎	倉孫兵衛	林新兵衛	木常助	林新造



